

に、岩質が大部分軟岩であつたため（一部分には逆巻工法を採用した程の軟弱なる部分あり）鉄筋コンクリート巻とした。但し岩質に応じて鉄筋量は加減し、稍硬い部分は水壓の三分一を鉄筋で保つ程度とした。

水槽は地中約30米掘り下げた内径12米の圓筒形であるが、地質良好であつた爲めに殆んど支保工なしに掘り下げ、底から鉄筋コンクリートで巻き上がり水壓は半分は岩盤に半分は鉄筋で保つ工法にし、底部に於ける工法は従來の應力計算法と異なつた方法に依り、兼ねて隧道より鐵管に至る流水も極めて圓滑に

行く様に特別の工夫を施した。尙水壓鐵管入口の置かるゝ空氣管は、冬期此地方の氣温が攝氏零下15度乃至20度に下つても凍らぬ爲めに、水面以下の部分は地中に入れる事にした。水壓管入口水門はバターフライバルブ（櫻田機械）を水槽上より運轉する事にし、動力は油壓とし、發電所其他電氣事故の時でも、水門を閉鎖出来る事とした。

此水槽の形式は溢流路を有するシングルサージタンクであるが、他のノンオーバーフローサージタンクとせざりし理由は、經濟的關係からは勿論であるが、本發電所には取入

取水口設計圖

